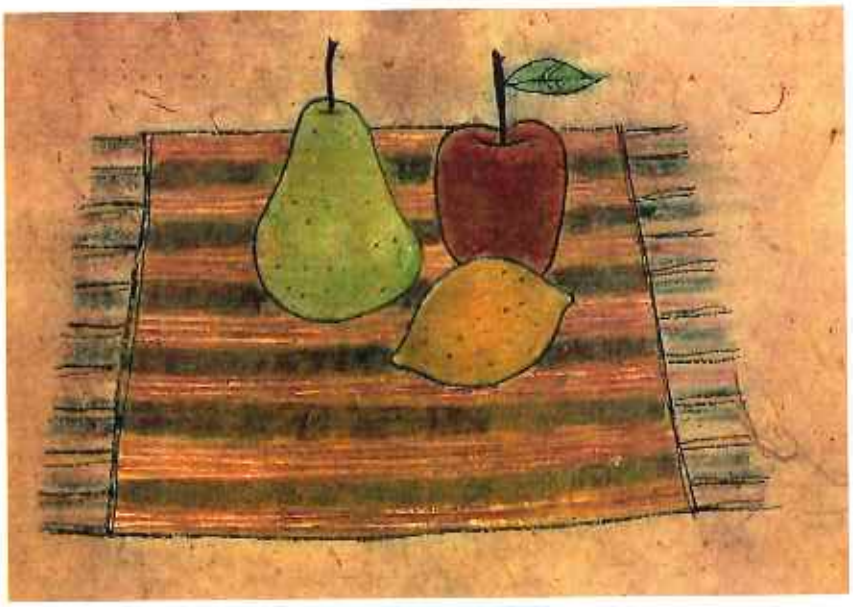
第一回～第五回（平成二十年度～平成二十四年度）

湖南市の小さな詩人たち

～子どもたちが創った
詩・俳句・川柳・短歌　入選作品集～

おじいちゃんの手



主催　湖南市教育委員会
協賛　水口ライオンズクラブ

はじめに

道ばたの小さな花や虫、季節の風、家族との何気ない会話など、日常の小さな出来事に心をふるわせ、自分の言葉で表現してみましょう。日本にはむかしから美しい表現が多くあります。「雨」という自然現象ひとつをとっても様々な表現がありますね。言葉を選んで表現する楽しさを感じてください。

また、人と人がコミュニケーションをとるとき、言葉はとても大きい役割を果たします。自分の思いを相手に伝えるとき、言葉が豊かであればより温かい人間関係が築けることでしょう。

そんな力を湖南市の子どもにつけたいと始められた「湖南市の小さな詩人たち」事業も、今年度で第六回を数えることとなりました。ここに第一回から第五回の入選作品をまとめました。湖南市の子どもたちがこの作品集にこころを動かし、ますます豊かな言葉の力を育んでくれることを願っています。

湖南市教育委員会

教育長　浅原　寛子

もくじ

○詩　部門
・小学校一年生～三年生の部……1
・小学校四年生～六年生の部……19
・中学生の部……39

○五七五　部門
・小学校一年生～三年生の部……57
・小学校四年生～六年生の部……67
・中学生の部……77

※いずれの部も【最優秀賞・優秀賞】【佳作】の順

○最終審査

詩部門　野呂（のろ）　昶（さかん）　選

五七五部門　平賀（ひらが）　胤壽（たねとし）　選

※最優秀作品には選評をいただきました。

最優秀作品の【評】はお二人によるものです。

【詩　部門】

小学校一年生～三年生の部

○掲載作品の作者の学年は、入選当時のものです。

最優秀・優秀

ふきふき　きれい
はくさい
にじのように
おかあさんのぎゅう
秋の落ち葉
山とぼく
うんどう会のライン
くものわたがし

いもうとのはなちゃん
おばあちゃんと犬
ゆめのせかい
お月さま
はるのかぜ
ザリガニさん
いし

佳作

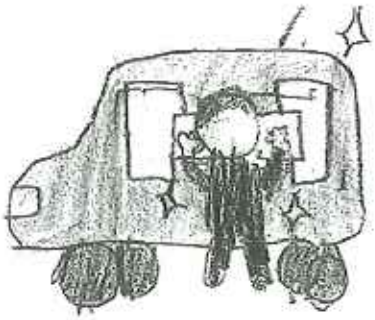
かめ
しんかんせん
トカゲのにんじゃ
ぶどう
もみじ
もみじだ
あめあめざあざあ
秋のパレット
くも
言葉

第六回（平成二十五年度）最優秀賞

ふきふき　きれい

下田小学校　二年　野邑　青亜

車をふきふき
　ピッカピカ
まどをきれいに
　ピッカピカ
じぶんのからだを
　ピッカピカ
みんなの地球を
　ふきふき
　きれいに
　ピッカピカ
みんなもいっしょに
　ピッカピカ



【評】

車や家の窓をきれいにみがくこと、自分の体をよく洗うことのよろこびが「ピッカピカ」という擬音のなかに、いきいきと表現されています。

じぶんやまわりの自然を美しくすることを、よろこびととらえたところがとてもいいと思います。

〈野呂　禎〉

第六回（平成二十五年度）優秀賞

はくさい

三雲東小学校　二年　山本（やまもと）　空宇馬（くうま）

ぼくは　はくさい
つけものになったり
サラダになったりする

いつもれいぞうこにいれられて
さむいさむい
けれどれいぞうこにいれば
キュウリたちとあそべる

「さようなら」を言ったら
おなべにいれられ
あついあつい

でもみんなにたべてほしい

にじのように

菩提寺北小学校　二年　生駒（いこま）　涼花（すずか）

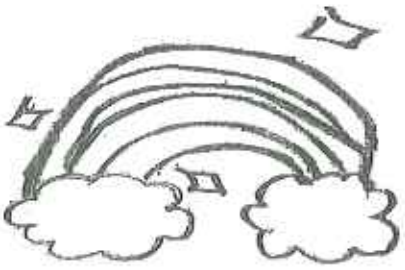
ぽつんぽつんと雨がふると
そのあときれいなにじがでる

けんかをしてしょんぼりしても
そのあとかならずにじがでる

しっぱいしても
そのあとやっぱりにじがでる

なやんでいても
そのあとぜったいにじがでる

だめなことも
そのあとはにじのような光がある
にじはみんなの心をうつしてる



第七回（平成二十六年度）最優秀賞

おかあさんのぎゅう

菩提寺北小学校　一年　大来（おおきた）　優生（ゆい）

おかあさんが　ぎゅうとすると
びょういんの　においがする
これは　おしごとの　におい
いっしょうけんめい　はたらいているにおい
がんばっているんだね

おかあさんが　ぎゅうとすると
おけしょうの　においがする
これは　おしゃれのにおい
きれいな　おかあさんに　へんしんのにおい
すてきだよ

おかあさんが　ぎゅうとすると
せっけんのにおいがする
これは　おふろあがりのにおい
わたしの　おうちのにおい
こころが　ほわっとするよ

おかあさんが　ぎゅうとすると
クッキーの　においがする
これは　おりょうりのにおい
おだいどころでみんなのためにはたらくにおい
いつもありがとう

わたしは　おかあさんの　ぎゅうがすき
いろんなにおいがする　ぎゅうが大すき
やわらかくて
あたたかくて
やさしくて

おかあさんが　ぎゅうっとすると
からだがとけそうで
あんしんするよ

【評】

お母さんは、一日になんども、ゆいちゃんをぎゅっとだきしめてくださるのですね。

「かわいいよ。だいすきよ。」お母さんは、からだでいっておられるのです。

その「ぎゅう」のなかに、ゆいちゃんは、お母さんのはたらいているにおい、おけしょうをして、きれいになったにおい、おせんたくのにおい、おりょうりのにおいなどを、ぜんしんで感じているのです。

「おかあさんが　ぎゅうっとすると　からだがとけそうで　あんしんするよ」さいごのフレーズが、みごとにゆいちゃんのお母さんへのきもちをあらわしています。

〈野呂　昶〉

第七回（平成二十六年度）優秀賞

秋の落ち葉

菩提寺小学校　三年　中平（なかひら）　優菜（ゆうな）

秋の落ち葉はしぜんのがっき
カサカサカサカサ音が鳴る
秋の落ち葉は虫のすみか
大きな葉の下にはダンゴムシ
秋の落ち葉はカーペット
ふわふわふわふわあたたかい
秋の落ち葉は花びら
ひらひらひらひら空をまう

山とぼく

三雲小学校　三年　横川（よこかわ）　巧（たく）

山小屋でねぶくろに入った
ぼくはいもむしだ
山にのぼってる
ぼくは米つぶみたいだ
ちょう上についた
ぼくは一番ののっぽさんだ
山から下りた
ぼくは足がいたくてロボットみたいだ

第八回（平成二十七年度）最優秀賞

うんどう会のライン

三雲東小学校　二年　佐山　勝輝

うんどう会がおわった
でもうっすらラインがのこっている
ラインも
がんばったように見える

【評】

運動会のおわった後の運動場は、しーんと静かです。その日のにぎわいが、なかったかのようです。でもラインがうっすらとのこっています。

「わたしたちもがんばったけれどラインもがんばったんだ」

おどろきをもって、ラインを見つめる佐山君の姿が見えてきます。新鮮な発見のあるすばらしい作品です。

〈野呂　昶〉

第八回（平成二十七年度）優秀賞

くものわたがし

三雲東小学校　一年　髙木（たかぎ）　遥人（はると）

ふわふわのくもにのって
ながいながいわりばしをつきさして
ぐるぐるぐるぐるまわして
大きな大きな
わたがしをつくりたいな

いもうとの　はなちゃん

菩提寺北小学校　一年　林田（はやしだ）　杏（あん）

えがおがかわいい
おっぱいをのんだあと
いつもまんぞくそうに
にこっとわらう
このえがおを見ていると
ほっぺをくにゅくにゅっとさわりたくなる

なきがおがかわいい
大すきなママをさがして
なみだをいっぱいながして
大ごえでかなしそうになく
このなきがおを見ていると
よしよしってだきしめたくなる

すやすやねがおがかわいい
ゆめを見ているのかな
えがおになったり　なきがおになったり
まるでおめんみたい
このねがおを見ていると
いっしょにねむりたくなる

はなちゃん大すきだよ
ずっとそばにいてあげるよ
どんなときもまもってあげるよ
だからあんしんして大きくなってね

だってわたしはおねえちゃんなんだもん

第九回（平成二十八年度）最優秀賞

おばあちゃんと犬

菩提寺北小学校　三年　山田（やまだ）　和晃蓮（あおば）

おばあちゃんは、やさしかった
とってもやさしかった
だけどある日くるしそうで、
ぼくは、いそいで助けに行った
トイレの時にたたしてあげた
何日かたって
びょういんへ行った
もうおそかった
ぼくは、トイレにとじこもってないた
次の日
犬がごはんを食べなくなった
ただかなしそうにしているだけだった
何日かたった
一どもうごかなくなった
父が見た
しんでいた
なぜしんだのだろう
考えているとかなしくなった
おばあちゃんがしんで、
すごく苦しかったんだろう

【評】

やさしかったおばあちゃん。そのおばあちゃんが病気で亡（な）くなってしまった。つづいてかわいがっていた犬も亡（な）くなった。犬もきっと、おばあちゃんの死（し）にショックを受（う）けたのでしょう。その時のようすを綴（つづ）った文章（ぶんしょう）から山田君（やまだくん）の哀（かな）しみが痛（いた）いほどにひびいてきます。

〈野呂（のろ）　昶（あきら）〉

第九回（平成二十八年度）優秀賞

ゆめのせかい

菩提寺北小学校　一年　生駒（いこま）　湊人（みなと）

ゆめのせかいってすごいな
だってもおもったものに
なれるからトラブンに
サウルカーせんしゅ、
なりたいものになれるから

ゆめのせかいってたのしいな
だってもくもにもかんたんに
のれるからみんなで
せクスるのこうに
かけいりょこうに
るよ

ゆめのせかいってうれしいな
だってるてしょうらいのゆめにも
なれるからしゅに
たいそうかんしゅ
かがくしゃはかせ
きんメダルもノーベルしょうも
もらえますもノーベルしょうも

ゆめはふしぎな
まほうつかい
きょうはどんな
ゆめのせかいにいけるかな

お月さま

下田小学校　三年　前田（まえだ）　杏弥（あや）

帰り道
今日もうしろをついてくる

しずかにそっと
うちにつくまでついてくる

そっとそっとふりむくと
かがやくえがおで
こっちをみてる
今日もきれいねお月さま

第十回（平成二十九年度）最優秀賞

はるのかぜ

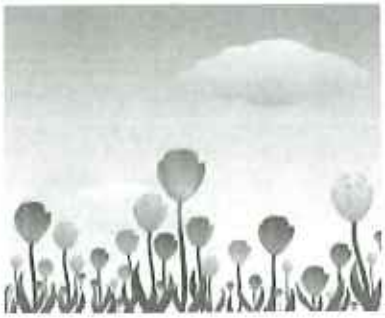
石部小学校　一年　佐々木　舜

るるるるるるる
はるのかぜがふくよ
きがゆれる
はなもゆれる
やまもゆれる
らんららんらんー

【評】

寒い冬が去って、あたたかい春がやってきました。その喜びを「はるのかぜ」をとおしてうたっています。「るるるるる」の擬音がとても新鮮です。木も花も山も喜んでゆれています。ゆれることで喜びをあらわしているのですね。とてもいい詩です。

〈野呂　昶〉



第十回（平成二十九年度）優秀賞

ザリガニさん

菩提寺北小学校　一年　近藤（こんどう）　圭真（けいま）

ザリガニさん
はさみをうえにあげて
じゅんびうんどうですか。

ザリガニさん
ぼくとじゃんけんしたいの。
ぼく　グーをだすよ。
そしたら　いつもかてるから。

ザリガニさん
ばんざいして　せのびだね。
ぼくとあそびたいのかな。

ザリガニさん
ぼくは　きみと
あくしゅしたいんだ。
だけど　きみのはさみがこわいんだ。
だからもうすこしまっててね。
ぼくが大きくなるまで。

いし

三雲小学校　三年　小谷（こたに）　胡桃（くるみ）

ころころころ
まんまるしかくさんかく
いろんなかたちの石がある
あか　くろ　みずいろ
いろんな色の石もある
ざらざらざら
つるつるつる
ぎざぎざぎざ
さわりごこちもいろいろある
どの石も
よーく見たら　顔がある

佳作（平成二十五年度）

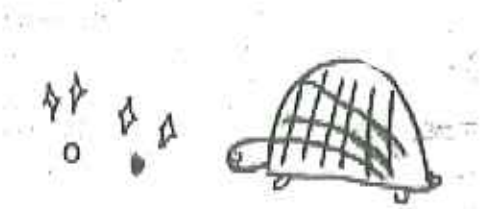
かめ

水戸小学校　三年　入野（いりの）　咲希（さき）

かめは
のろのろ
おそい
だれよりも
おそい

でも
地面に
おちている
小さなものを
見つけられる

かめより
はやく
歩く人は
小さいものは
見つけられない



足がおそくてもいい
なにもおかしくない
いつかはどこかに
たどりつく
そう、しんじて
いれば
いい

佳作（平成二十六年度）

しんかんせん

三雲東小学校　一年　青山（あおやま）　遥（はるか）

しんかんせんはやいけど
まつぼっくりのせても
どんぐりをのせても
はやいのかな

おべんとうをのせても
バスをのせても
はやいのかな

ゴリラをのせても
おばけをのせても
はやいのかな

ぜんぶのせて
はやくきてね

トカゲのにんじゃ

三雲東小学校　二年　雲（くも）　翔大（しょうた）

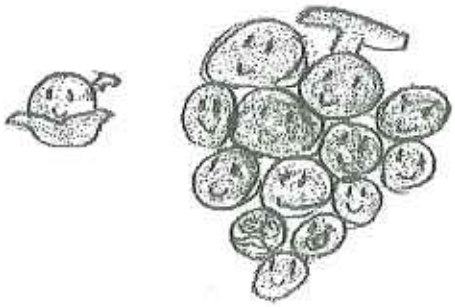
しゅるるんしゅるん
トカゲはにんじゃ
かべにペタペタペッタン
はりついて
いっつもにんじゃになっている

佳作（平成二十七年度）

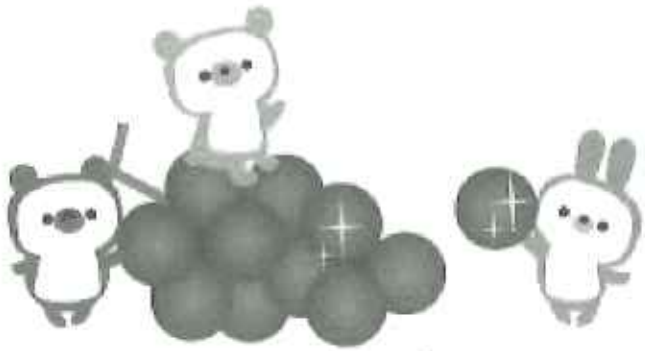
ぶどう

石部小学校　三年　山本（やまもと）　茜（あかね）

ぶどうがあるよ
食べてみよう
たくさんの兄弟
ひとつひとつが
おいしいぶどう
大きいぶどうは
つぶつぶつぶ
小さいぶどうは
つぷつぷつぷ



むらさき色の
かわをぬぐと
緑のほう石が
出てくるよ
あまいにおい
あまい味
やっぱり
ぶどうは
さいこうだ



もみじ

菩提寺小学校　二年　大西（おおにし）　愛純（あずみ）

あきになると
空からもみじが
おちてくる
もみじが風にふかれて
ひらひらおちてくる
私の頭の上におちてくる
どんどんもみじが
じめんにふりつもる
おちたもみじがじゅうたんみたい
じゅうたんの上にすわる
ああじゅうたんの上にすわると
あったかいな

もみじだ

菩提寺北小学校　一年　内田（うちだ）　有咲（ありさ）

ひとりでおさんぽ
あたまにもみじさん
ぽつんとさびしそう
てのひらにのせて
きのうえにのせてあげたよ

佳作（平成二十八年度）

あめあめざあざあ

水戸小学校　一年　田中（たなか）　理音（りおん）

かさをわすれて
ざあざあ
あめがふって
ざあざあ
かさにあたった
ざあざあ
でんちゅうにあたって
ざあざあ
はやくかえりたいよ
ざあざあ
もうすぐままがくる
ざあざあ

秋のパレット

三雲小学校　三年　江崎（えさき）　由里穂（ゆりほ）

秋は森のパレットだ。
紅葉の赤色で太陽をかいている。
いちょうの星はまっ黄っき。
どうやら森は空をかいているらしい。
つぎはなにをかくのかな。

佳作（平成二十九年度）

くも

三雲東小学校　一年　京牟礼（きょうむれ）　紫（ゆかり）

あめがふって
くもがないてる
ぽつぽつぴちぴち
どんどんないて
わたしがなぐさめないと
いけないみたい

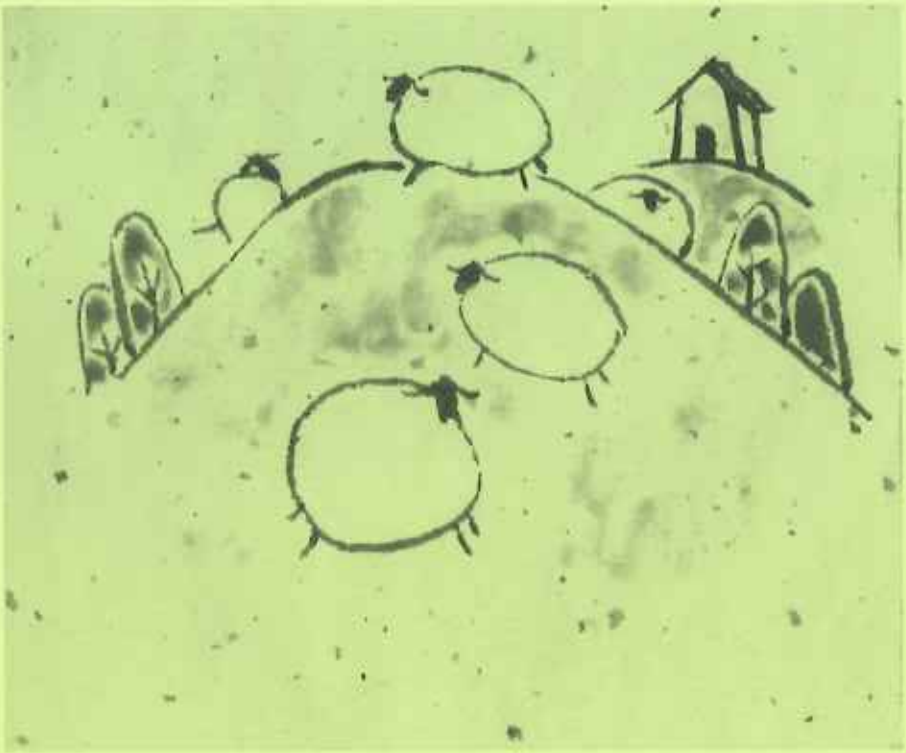
言葉

岩根小学校　三年　下村（しもむら）　友駿（ゆうしゅん）

たいこは
どんどんなるから
どんどん語だ
レジぶくろは
シャカシャカなるから
シャカシャカ語だ
だんごむしは
ころころころがるから
ころころ語かな
けしゴムは
こすってけすから
けしけし語
えんぴつは
かきがすきだから
かきかき語かな
わかればいいな
いろんな　言葉

【詩　部門】

小学校四年生～六年生の部



○掲載作品の作者の学年は、入選当時のものです。

最優秀・優秀

小さな努力　本
しるし　ずっとこぐ
いろんな音　色えんぴつ
リレーのバトン　明日の私は新しい
おかえり　読書
月　今だれかが
一〇〇メートル走
絆
木枯らしが

佳作

希望　えんぴつ
呼び名　空
秋の葉っぱ　ぼくは地面
カッター活動　組立体操
ランドセルと思い出　ドキドキ
木の思い　成長の入れちがい
家族っていいな
あの日　ゴメンね
大縄

第六回（平成二十五年度）優秀賞

小さな努力

石部小学校　六年　内田（うちだ）　愛理（あいり）

強い雨と風の中　あれた庭で
かたつむりが　ひっしで
うえきばちに　はりついていた
その姿は　けんめいになにかを
のりこえようとしている　私たちのようだった

小さなものでも　努力しているから
私たち人間も　努力しよう
暴風や　雨　雷　たとえ
苦しくて　やめたくなっても
あきらめず　必死で　上を　めざそう
いつまでも　いつまでも

しるし

水戸小学校　六年　清水（しみず）　菜帆（なほ）

短くなった　えんぴつ　ボロボロだけど
文字をいっぱい書いた　しるし
小さくなった　消しゴム　ボロボロだけど
文字をいっぱい消した　しるし
黒くなった　ノート　ボロボロだけど
勉強をいっぱいした　しるし
ボロボロになったぶんだけ
自分が成長する
しるし

いろんな音

三雲小学校　五年

酒井（さかい）　那月（なつき）祈

朝から台所にはいろんな音がある
ジュージュージュージュー
何かをいためる音
グツグツグツグツ
おなべの音
トントントントン
野菜を切る音

学校にもいろんな音がある
キーンコーンカーンコーン
チャイムの音
カキカキカキカキ
えんぴつの音
カッカッカッカッ
チョークの音
パチパチパチパチ
そろばんをはじく音

ジリリリリと目覚まし時計がなると
一日の始まり
今日も世界のいろんな場所で
いろんな音が
私たちを待っている

第七回（平成二十六年度）最優秀賞

リレーのバトン

石部小学校　五年　上田　達也

ぼくは、バトン
ぼくは、みんなにぎられて
みんなの気持ちが
わかるんだ
一位をとりたい気持ち
なん位でもいいからがんばろうとする気持ち
最後の力をふりしぼる
力を合わせてがんばろうとする気持ち
こけたりもするさ
でもあきらめない気持ち
ぼくは、わかる
だってぼくは、
みんなにぎられている
バトンだから

【評】

リレーのバトンを通して、けんめいに走っている子どもたちの気持ちがいきいきと描かれています。バトンには、そのにぎりかたによって、子どもたちのそれぞれの心の中がわかるのですね。

「一位になりたい気持ち」「なん位でもいいけれど、全力で走ろうとする気持ち」「たとえこけても、最後まで走りきろうとする気持ち」など。

上田君は、バトンの気持ちになりきって、リレーの選手の一人ひとりの思いや願いを書いています。その表情がとてもユニークですぐれていました。

〈野呂　昶〉

第七回（平成二十六年度）優秀賞

おかえり

菩提寺小学校　六年　田中（たなか）　春樹（はるき）

今日の「おかえり」はしり下がり
何かあったのかな
母の声がしずんでいる

今日の「おかえり」はしり上がり
何かうれしいことがあったのかな
ぼくが近所の人にほめられたみたい
母の声がはずんでいる

今日はぼくから
元気のある「ただいま」を
言おう

月

菩提寺小学校　五年　上野（うえの）　朝奈（あさな）

見てないようで
見ている

出ていなくても
雲の向こうで
そっと見ている

見てないようで
見ている

雲がどいて
夜にやったら
やっと顔を出す

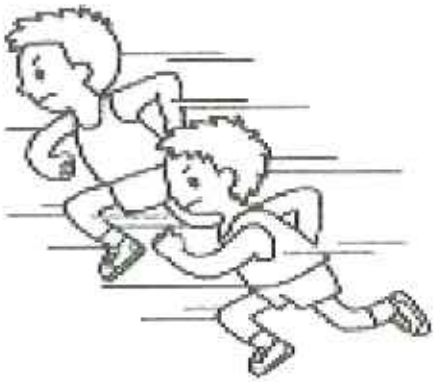
そして
空の遠くで
じっと見ている

第八回（平成二十七年度）最優秀賞

一〇〇メートル走

石部小学校　六年　青木　航弥

スタートの瞬間
一瞬
息が止まる
頭の中が
真っ白になる
ピストルの音で
一気に前に飛び出し
風の中に吸い込まれる
ただゴールだけを見て
ただ夢中で
足を動かす
ゴールの瞬間
心臓の音の大きさに気づく



【評】

百メートル走のスタートの緊張した瞬間から、ゴールを目指し全力で走る様子が、迫力のある言葉でいきいきと表現されています。特にピストルの音で前に飛び出す瞬間を「風の中に吸い込まれる」と表現したフレーズは秀逸。作者ならではの独自の感性、才能を思いました。今後も意欲的に日々の生活の中で体験した感動を詩に表現して下さい。

〈野呂　昶〉

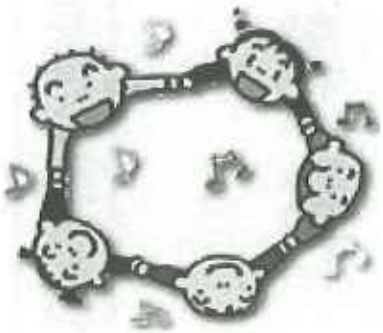
第八回（平成二十七年度）優秀賞

絆

下田小学校　六年　梅田（うめだ）　珠希（たまき）

絆って何だろう？
みんなの仲がいいこと？
毎日楽しいこと？
クラスの雰囲気が明るいこと？
たぶんどれも正解だ

絆はきっと
見えない糸だ
人と人をむすんでる
心の糸だ
その糸がたくさんの人と
つながっていればいるほど
そのクラスは楽しいんだ



絆はきっと太くなる
ケンカしても
泣いても
笑っても
何かあるたびに太くなる
そんなクラスは
毎日笑顔と
「ありがとう」が
飛び交うだろう

そんなクラスは
楽しいだろう
過ごしていてうれしいだろう
笑顔も「ありがとう」もあふれているだろう
そんなクラスが
もっともっと増えますように

木枯らしが

菩提寺北小学校　五年　山川（やまかわ）　陽月（ひづき）

木枯らしが冬をつれてやってきた
木々が　少しずつ　ゆっくりと
ねむっていき
落ち葉はカラカラと　風のダンスを
はじめる

木枯らしが冬をのせてやってきた
ねこは陽があるところでもキュッと
丸まり
雪が　山を　木を　草を　家を
かくしていく

木枯らしが冬をつれてやってきた

第九回（平成二十八年度）最優秀賞

本

石部小学校　六年　川口　乃愛

私は毎日本だなにいる
だれにも借りられることなく
だから外の世界も見たことがない
いつも少し暗い図書館で
外の世界を想像している
私はとても古い
人は新入りの新しい本ばかり読んで
古い私は読んでくれない
ただいつもほこりをかぶって
さらに古くなっていく
ある日いつもと同じように
本だなで外の世界を想像していた
そのとき一人の人間が
私を手に取った
どうせまた開くだけで
借りてくれないだろうと思っていると
ししょの人が「ピッ」とコンピュータの音を鳴らすとともに
私は借りられた　何十年もこの時をまっていた
やっと借りられた　何十年もこの時をまっていた
そしてまた何十年も借りてくれる人をまつ

【評】

図書館の本棚。つぎつぎ新刊の本が入ってきて、多くの人がそれを借りていきます。その中で長い間借りられることもなくなりんでいる本、借りてほしい、読んでほしいと願いながら、もう何年も外へ出たことがない、その本の願いを書いています。ものを見る目がユニーク。深くものごとの真実を見つめています。

〈野呂　昶〉

第九回（平成二十八年度）優秀賞

ずっとこぐ

菩提寺北小学校　四年　高松（たかまつ）　ひかり

自転車こいだら
どんどんすすんだ
ふわりふわりと
風がほほを　なでていく
ガタゴトガタゴト
でこぼこ道　曲がり道
大きな山　広い川
のりこえられない道などない
それは　どんな道
みらいの道
世界に一つわたしだけの道

色えんぴつ

石部小学校　六年　大継（おおつぐ）　真由（まゆ）

私は青の色えんぴつ
ある日は広い青空をかき、
ある日は深〜い海をかいた。

私は赤の色えんぴつ
ある日はギラギラ太陽かいて、
海にうかんで照らされてしずくが光るうきわをかいた。

私は緑の色えんぴつ
ある日は高い山々かいて、
バスケットの中のフルーツかいた。

私たちはいつも十二本、箱の中でねむり、この世界を色づける。
最後は空にうかぶ白い雲をかいて、
しっかりゆっくりえんぴつしまった。
次もお願いというように。

第十回（平成二十九年度）最優秀賞

明日の私は新しい

三雲小学校　六年　佐山　乙羽

明日の私は新しい
たとえ上手くできなくても
明日になればきっと出来る

明日の私は新しい
普段とちがう場所にでも
明日になればきっと慣れる

明日の私は新しい
色んな経験を積み重ね
明日になればきっと発揮出来る

新しい私を作るのは
今日を精一ぱい
生きた
今の私
明日の私はきっと新しい

【評】

明日に希望を持って、一日一日を精一杯努力して生きる新しい私は、そうした努力の結果、生まれるのですね。不得意なことも、いやなことも、それを乗り越えれば、新しい力、希望になります。新しい私を生み出す喜びをいきいきと表現しています。〈野呂　昶〉

第十回（平成二十九年度）優秀賞

読書

石部小学校　六年　横山（よこやま）　夕夏（ゆか）

本だなをみると本が語りかけてくる
図かんが「知らないことを教えてあげよう」と言う
マンガが「たくさん笑って楽しもう」と言う
物語が「すてきな世界へ行こう」と言う
私はその声にさそわれページを開き
文字と遊ぶ
次ぎは何を読もう

今だれかが

菩提寺北小学校　六年　鈴（すず）　啓斗（ひろと）

今だれかが生まれた。
今だれかが立った。
今だれかがねた。
今だれかがおきた。
今だれかが歩いた。
あたりまえだと思っているこのような毎日が…
この生きているということが幸せなんだ。
いまぼくが笑顔になった

佳作（平成二十五年度）

希望

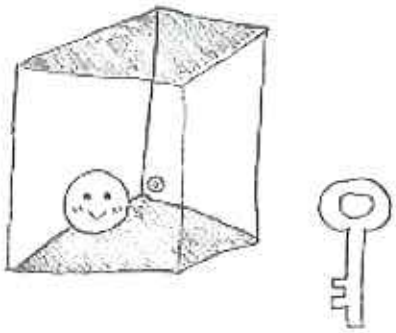
菩提寺小学校　六年　川端（かわばた）　桃葉（ももは）

ぼくは
希望。
ぼくは
きみの中にいる。

でも、
ぼくがいる所には
ドアがあって、
そのドアには
カギがかかっている。

そして、
そのドアを開けることができるのは、
きみだけ。
それを知っているのも、
きみだけ。

だから、
きみがドアを開けること、
ずっとずっと
おうえんしてるね。



佳作（平成二十六年度）

呼び名

水戸小学校　五年　太田（おおた）　莉奈（りな）

私の名前はりなです
ママは私のことをおりなさんと言います
おりなさんです
おひなさんじゃありません
パパはりーちゃんと呼びます
パパにはいっつもあまえます
お兄ちゃんはたりなと呼びます
理由は分かりません
お姉ちゃんはり～な～と呼びます
少しびくっとします
私には呼び名がたくさんあって
すごいでしょ

秋の葉っぱ

菩提寺北小学校　四年　山川（やまかわ）　陽月（ひづき）

秋の葉っぱは
赤に黄色にオレンジ色
まるで木が秋のドレスを
まとったみたい
秋の葉っぱは
最後は落ち葉
さくさくざくざく
秋のじゅうたん
秋の落ち葉は
冬みんじゅんびの
リスのふとん
春までぐっすり
秋の葉っぱは
ドレスにじゅうたん、リスのふとん
いろんなものに大変身

カッター活動

三雲東小学校　五年　中村（なかむら）　京香（きょうか）

「よういー　いち　そーれ」
かけ声が
びわ湖全体に
ひびきわたる
オールと水が
せっしあい
水はピチャピチャと
しぶきをあげ
オールは重くなり
カッターていが
なかなか進まない
カッターていが
湖の流れにのって

プカプカゆれている
いろいろな水鳥と
いっしょにゆれている
やっとついて
ふりかえれば
びわ湖が
ピカピカ
光ってる
「ありがとう」
といってるみたいに

佳作（平成二十七年度）

ランドセルと思い出

菩提寺北小学校　六年　井上（いのうえ）　紗弥花（さやか）

新しいランドセル
買ってくれた　お父さん
祝ってくれた　お母さん
うれしいな　うれしいな

キズがついたランドセル
先生たちの　お話
おそろいの　ストラップ
楽しいな　楽しいな

古い古いランドセル
あの時の　鉛筆
思い出のつまった　日記
大切にしまってくれた
ランドセル
ありがとう　ありがとう
もう休んでいいんだよ

木の思い

菩提寺小学校　六年　山元（やまもと）　心温（しおん）

ぼくは、幸せの木
ぼくは美しい葉を風にさそわれ、おどらせる。
美しい葉はいずれ落ち、孤独になりながらも
生き物を助ける。
そしてまた美しい葉を咲かし、人間に希望を与える
木と木で協力し、七色に輝く森をつくる
そこには虫たちが住み、
森は虫たちの音楽会になり、
その音色にさそわれ、またおどる
こんな幸せがいつまでも続くと思ってた
人間たちの手により、木々を切りさかれ
虫たちは悲しみ、幸せをさがしてる。
だけど、人間は幸せそう

ぼくは、孤独の木
悲しみにあふれている
美しい音色は聞こえなくなり、
雑音しか聞こえない。
いつかぼくも人間の手により切られ、
悲しみしか感じなくなるのかな？

家族っていいな

菩提寺小学校　四年　委細（いさい）　峻士（しゅんじ）

ぼくが肺炎になった時
家族が心配してくれた

いつも落ち着いたお父さん
いつも怒ってばかりのお母さん
いつも意地悪をするお兄ちゃん
いつも生意気な妹

そんな家族が
「だいじょうぶか」とたずねてくれ
背中をさすってくれた
やさしく話しかけてくれた
静かに遊んでいてくれた
それぞれに心配してくれた

ぼくは
早く治そうと思った
家族っていいな

佳作（平成二十八年度）

あの日　ゴメンね

菩提寺小学校　四年　菊地（きくち）　真央（まお）

あの日　ゴメンね
ケンカをしていたからってむししてゆるしてくれるかな
君は泣いていたね
君の涙がこぼれるたびに
心がわれる音がきこえたよ
私も　くるしかったよ

君のないているすがたを見て私は
むししてほかの人の所へ行ったね
本当は　あやまりたかったよ
本当にゴメンね……。
ゴメンね……。

大縄

三雲小学校　五年　佐川（さがわ）　結唯（ゆい）

縄が空中に浮かぶ
成功をして思いっきり喜ぶ
子どものように

縄が地面をける
何度も挑戦し努力の証を
地につけるように

わたしたちは前へ飛びこむ
その一回一回に心をこめて
宝物を大切にするように

縄と共に走りぬける
仲間と心をつないで
試練さえ乗りこえて
満面の笑みをうかべて

えんぴつ

石部南小学校　六年　山中（やまなか）　将瑛（しょうえい）

ぼくは、えんぴつ
ふでばこに住んでいる。
消しゴムがきらいだ。
いっしょうけんめい書いた字を
消してくる。
たまにしんがおれる
しんがおれると
心もおれる
しっかりとしんのある
えんぴつになりたい
ぼくは、えんぴつ

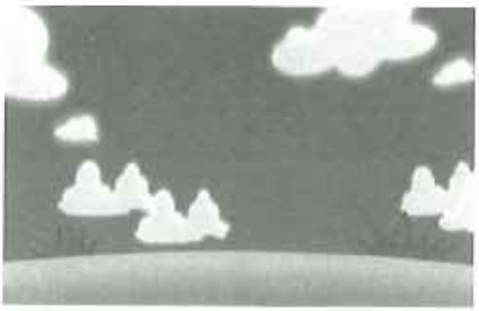
空

石部小学校　六年　福山（ふくやま）　凛佳（りんか）

ニコニコ笑っている空
しずくがポツリ　泣いている空
雪がシンシン　ふるえている空
カミナリ　ゴロゴロ　おこっている空

いつも私を見守っていてくれる
うれしい時も楽しい時も
悲しい時もつらい時も
まるでお母さんのように

これからも　よろしく
大好きな空



佳作（平成二十九年度）

ぼくは地面

三雲小学校　四年　草開（くさびらき）　昂（こう）

ぼくはいろいろな人や、
車にふまれているけど、
ぼくはじまんできることがあるんだ。
それは、
体が世界中につながっているんだ。

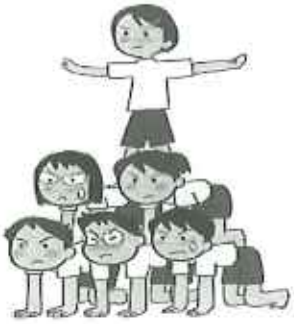
ぼくの上で、
世界中の人が、
すわったり、
遊んだり、
歩いている人がいる。
でも、
戦争している人がいたり、
亡くなる人がいたり、
悲しい人もいる。

今日も、
ぼくの上には、
いろいろな人が、
生きている

組立体操

石部小学校　六年　北村（きたむら）　大地（だいち）

組立体操は不思議な演技だ
上の人は下の人の重さを知らない
下の人は上の人のこわさを知らない
それでもおたがいを信じて協力できる
それは今までも、これからも続く
大切な仲間だからだ。
おたがいのこわさや痛さはわからないけど
一人ひとりが仲間を思うから
感動できる演技になる。
それが組体だ。



ドキドキ

菩提寺北小学校　六年　新田（にった）　志野（しの）

授業中、思い切って手を挙げる
先生に当てられ起立する
途端に
ドキドキ　ドキドキ

体育の時間、思いっきり走った後
息は激しくハアハア
心臓は
バクバク　ドキドキ

夜、自分の部屋に一人でいるとき
シーンとした部屋に
何か不気味な音
あっちを見たり、こっちを見たり
きょろきょろ　ドキドキ
クリスマスのプレゼント
リボンをほどいて包みを開けるとき
わくわく　ドキドキ
わくわく　ドキドキ

心臓は一つなのに
いろいろなドキドキがある
ドキドキって　おもしろいな
ふしぎだなあ
私は「わくわく　ドキドキ」の
ドキドキが一番好き

成長の入れちがい

石部南小学校　六年　吉川（よしかわ）　琴美（ことみ）

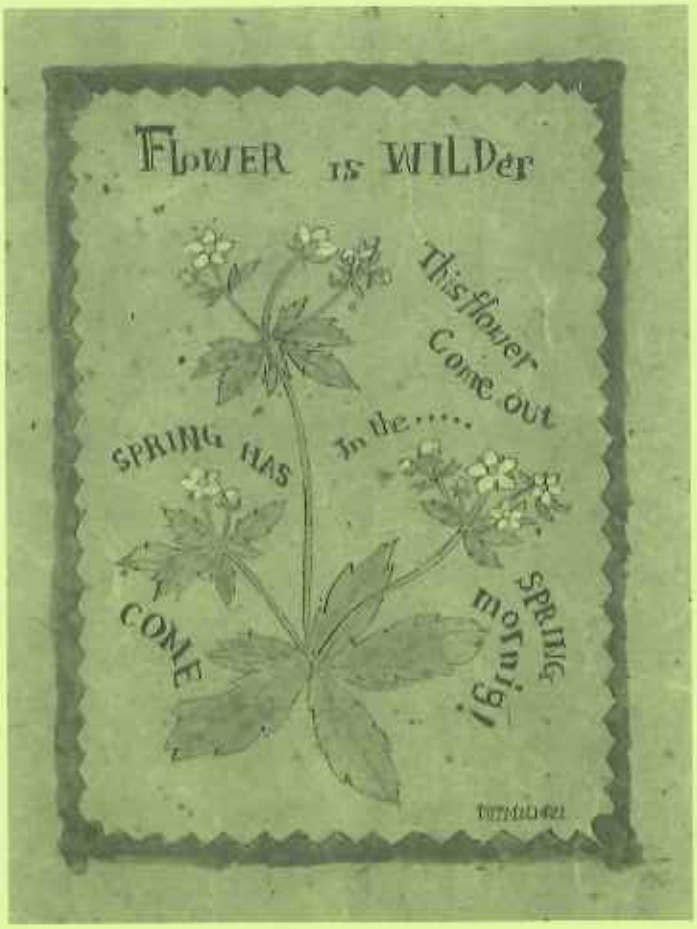
えんぴつは私が大きくなるたびに
短くなっていく
えんぴつは字を書くたびに
短くなっていく
今まで何百本つかっただろう

けしごむは私が大きくなるたびに
小さくなっていく
私がまちがえるたびに
小さくなっていく
今まで何個つかっただろう

私が大きくなっていくたびに
小さく短くなっていく物
その「物」たちに
「ありがとう」を伝えたい

【詩部門】

中学生の部



○掲載作品の作者の学年は、入選当時のものです。

最優秀・優秀

心のキャンバス　空の心
風がふく　永遠
夕やけ　風鈴
ノイズ　におい
私の思い　その声で
夢中になれる瞬間
手
枯葉
あしあと

佳作

世界の色
釣り
成長
夏の音
奏
僕とは？
笑顔
笑顔
糸
ボール

第六回（平成二十五年度）最優秀賞

心のキャンバス

石部中学校　三年　鳥井　菜月

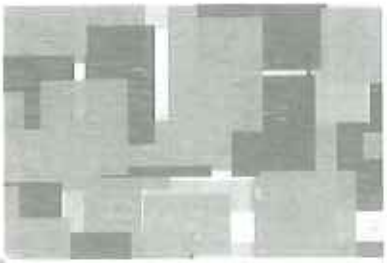
友達とたくさん話した日
私の心のキャンバスに
その子の好きな「赤色」をぬる

母とケンカした日
私の心のキャンバスに
涙の色の「青色」をぬる

一つ。小さな幸せを見つけた日
私の心のキャンバスに
優しい色の「緑色」をぬる

日々をかさねるほど
私の心のキャンバスは
たくさんの思い出と
たくさんの色で溢れ出す

明日はどんな色をぬるのかな。



【評】

日常生活でのよろこびや悲しみを栄養にして、私たちは人間として成長していきます。心の中にはキャンバスがあってそこによろこびの色や悲しみの色をぬり重ねていく。そしてその人固有の人格の色が生まれる。発想がとてもいいと思いました。

〈野呂　昶〉

第六回（平成二十五年度）優秀賞

風がふく

甲西北中学校　一年　熊﨑（くまさき）　亮斗（りょうと）

風がふく
木の葉が道路へ落ちていく
風がふく
雨のいきおいが強くなる
風がふく
紅葉の葉が宙をまう

風がふく
いやな思い出
風がふく
心の黒雲
風がふく
すべてが
ふきとばされる

風がふく
ぼくの心に一筋の光

夕やけ

石部中学校　二年　井手（いで）　菜月（なつき）

夕やけを見ると温かい気持ちになる
みんなに助けてもらったことや、
嬉しかったことを思い出す
私も優しくなりたいと願う

夕やけを見るとせつなくなる
もっともっと頑張れるはずなのに弱気な自分
がいる
このままじゃだめだと気付かされる
強くなりたいと願う

夕やけを見ると前向きになる
ありがとう、感謝の気持ちがこみ上げてくる
なぜか笑顔になれる
明日も楽しい一日であるようにと願う

第七回（平成二十六年度）優秀賞

ノイズ

甲西北中学校　二年　西河（にしかわ）　幸恵（ゆきえ）

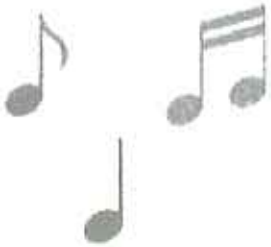
聞こえる
ペンをノートに走らせているのが
部屋の中がざわざわとうるさいのが
誰かと誰かが競いあっているのが
青春の一ページ目をそれぞれがめくっているのも

聞こえるの
地がみんなに踏まれているのが
海の水が風で波になっているのが
空にある雲が泳いでいるのが
自然が優しく笑っているのも

聴こえるよ
地球が鼓動を打っているのが
宇宙が広がっているのが
そんな中で生命があるべき場所へ還り
またここに返ってきている音さえも

聴こえるかい
一秒一秒時間がたっているのが
変わらない日々もすぎていくのが
私は今を生きているから

―全てをすましてみて
きっと「何か」がきこえるから……



私の思い

甲西北中学校　三年　髙畑（たかはた）　実穂（みほ）

人が多いところでは
消えたい
と思うのに

一人でいると
さみしい
と思う

誰かとつながっていたい
と思うのに
面と向かうと恥ずかしい

支えたい
と思うのに
いつも支えられている

変わりたい
けど
変われない

もう
このままでいいのかな

第八回（平成二十七年度）最優秀賞

夢中になれる瞬間

石部中学校　二年　後村　紗希

体育館に広がるシューズの音
ボールがはずむ音
汗が流れる背中に
緊張感が全身を伝わる
ボールを追いかけ
飛び上がったその先は
自分だけの頂の景色
ボールを全力で打ち込む
ネットをこえて
回転しながらコートに響く
ボールの音はここちよい

【評】

バレーボールの試合か、あるいは練習時の真剣に取り組む様子を表現した作品です。

「体育館に広がるシューズの音」「ボールがはずむ音」体のしなり、躍動が緊張感のある言葉で見事に表現されています。スポーツでも勉強でも、なにかに真剣に取り組む瞬間は、至上の美であり、感動であることを、的確な言葉で伝えています。

〈野呂　昶〉

第八回（平成二十七年度）優秀賞

手

石部中学校　三年　三上（みかみ）　紗輝（さき）

おばあちゃんの手
私と同じ小指が短い
私とにたような手

でも

おばあちゃんの手は
しわがたくさんあって
働き者の手
上手に機械を動かす
器用な手
小さいころ手をつないでくれた
やさしい手

おばあちゃんは私の手がいいと言うけれど
私はしわがあって
たくさん働いてきた
おばあちゃんの手もいいなと思った
私もいつか
こんな手になりたい

枯葉

石部中学校　一年　込山（こみやま）　楓翔（ふうと）

僕は、枯葉を踏む音が好き。
サックリとうすく、乾いて縮まったその音が
葉っぱの砕ける感触が
くつの底に伝わってくる。
カサッパリンと
歩くたびに微かだけれど
トーンの高い音の群れ
まるで音楽のようだね
あーあ気持ちいいなあ。

第九回（平成二十八年度）最優秀賞

あしあと

石部中学校　二年　水谷　茜里

私のあしあと
あなたのあしあと
家族のあしあと
友達のあしあと
いろんなあしあと……

今まで一歩いっぽ　歩んできた
それぞれの道のりは　違うけれど
誰もが一歩いっぽ　歩んできた

ふりかえると　自分のあしあとが
ほら、そこに

明日も一歩
これからも一歩
ずっとずっとつづくあしあと

刻みつづけよう　自分だけのあしあとを
大切にしていこう　ほかの誰かのあしあとも

【評】

私のあしあと、家族のあしあと、友達のあしあと、どのあしあとも生まれてから今日まで、人生を一歩一歩、歩いてきたその人だけの歴史です。人それぞれ道程はちがうけれど、あしあとの重み、大切さは変わらない。あしあとを通して、人生のあり方をよく見つめています。特にラストの二行が秀逸です。

（野呂　昶）

第九回（平成二十八年度）優秀賞

空の心

石部中学校　二年　宮崎（みやざき）　紗綾（さあや）

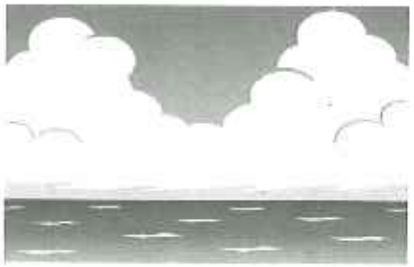
やさしい水色
あかるすぎない太陽
うすくのびる雲
どこか温かい春の空

きれいな青
ギラギラした太陽
強くたくましい入道雲
元気をくれる夏の空

赤・オレンジ・紫
まっかな夕陽
月の中のうさぎ
心が落ちつく秋の空

うすい灰色
ちらほら降る雪
空を覆う　うすい雲
どこか悲しい冬の空

空と私　私と空
心はいつもつながっている



永遠

石部中学校　三年　後村（ごむら）　紗希（さき）

青い空　澄んだ空気
清らかな水　緑豊かな木々
色とりどりの草花
たわわにみのった果実

はるかに続く黄金色の田園
そこに育む生き物

いつまでも永遠に続いてほしいものが
そこにある

家々のあたたかな明かり
人々の笑い声
絶えぬぬくもりが
そこにある

永遠にあってほしいもの
願う心と行動力
確かなものがそこにある

第十回（平成二十九年度）最優秀賞

風鈴

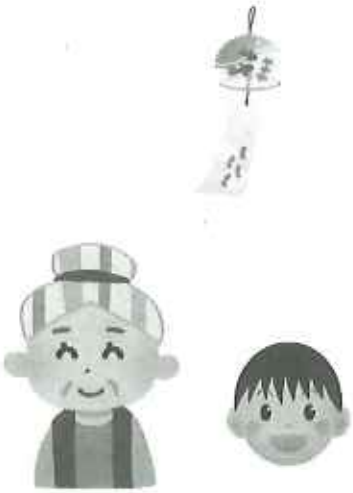
甲西北中学校　二年　小林　蓮

夏休みおばあちゃんの家にいった。
おばあちゃんの家にはエアコンも
せんぷうきもない
あつくないのといったら
風鈴があるから大丈夫
風鈴なんかうるさいだけと僕
じゃあ静かにしといてみとおばあちゃん
家中にひびきわたるせみの音
そこにかすかに
チリンチリン
その時僕は
なんだか少しここちよくなった

【評】

エアコンも扇風機もないおばあちゃんの家。「暑くないの」と聞くと「風鈴があるから大丈夫」と応えられた。おばあちゃんは、風鈴のすずやかな音で、すずしさを感じておられるのですね。なんとすてきなおばあちゃんでしょう。賑やかなせみの鳴き声の合間にチリンチリンとなる風鈴の音、この情景がとても美しい。おばあちゃんのお人柄そのものを現しているようです。

〈野呂　昶〉



第十回（平成二十九年度）優秀賞

におい

石部中学校　二年　江南（えなみ）　有羅（ゆら）

家で感じる沢山のにおい
少し散らかった私の部屋のにおい
すぐに眠りについてしまう布団のにおい
白い湯気に包まれたお風呂のにおい
家族のためにつくるお母さんの料理のにおい
私が一番ほっとできる　そんなにおいのつまった場所

学校で感じる沢山のにおい
色々なドラマが生まれる教室のにおい
授業中に眠気を誘う教科書のにおい
自分の心情が音となって表現される楽器のにおい
私を成長させてくれるそんなにおいのつまった場所

日常に感じる沢山のにおい
雨降る日に通る道のにおい
風が運んでくる季節のにおい
「生きている」を実感する　そんなにおいのつまった場所

においは思い出となって心に残り、一瞬で時間を巻き戻す
なつかしいにおい　豊かになる心
脳裏によみがえる　過ぎさった日々
成長の数だけ　においの数は増え
私の宝となる

その声で

石部中学校　二年　伊奈（いな）　優真（ゆうみ）

がんばれ　がんばれ
その声で私は少しがんばれた

まけるな　まけるな
その声で私は自分自身に勝つことができる

いけるいける
その声で私は少し自信がもてる

一つ一つのその声が
誰かががんばる元になる

大きな声を出してみて
その声、きっと届くから

佳作（平成二十五年度）

世界の色

甲西北中学校　一年　西河（にしかわ）　幸恵（ゆきえ）

今日の世界は水の色
真っ白の雪のような雲一つない
キレイなキレイな青空に
輝く太陽　笑っている

今日の世界は灰の色
真っ白の雲はどこにもなくて
太陽はかくれんぼをしてしまって
地上が少し　暗くなる

今日の世界は黒の色
神様が流した涙が
この地球をぬらしていく
自然は喜び　微笑んでいる

今日の世界は虹の色
黒い空は青に戻り
七色のキセキが大空に架かる
世界は今日も色に染まる

私の世界は何の色
想像あふれる　未来の色

私の未来は何の色
どこにもない　希望の色

佳作（平成二十六年度）

釣り

日枝中学校　二年　山口（やまぐち）　亮（りょう）

釣糸をたらす僕
じっと引きを待つ
神経を集中させ
凪（なぎ）いだ海を見つめる
海面がゆれるたび
心臓が高鳴る
ひたすら待つ間
静かな喜びを感じている

佳作（平成二十七年度）

成長

石部中学校　一年　村上（むらかみ）　旦陽（あさひ）

あの空は昨日と今日で色が違う
あの雲は昨日と今日で形が違う

去年のぼくが見た空は、ずっと遠くに見えたけど
今のぼくが見る空はほんの少し近くに見える

空が変わっていくように
ぼくもだんだん変わっていく

それはきっと「成長」ということ
あの空に届くほど一日一日成長しよう

夏の音

日枝中学校　三年　高村（たかむら）　いずみ

ぷしゅっと
父はビールの缶を開け
はふっと
姉はスイカを頬張る
かしかしと
母は肌をかいて
かこかこと
私は音をならして字をかく

家からでも見える花火は
扇のようで
夜空一面と
私の心をうばっていく

ずどんと鳴る扇が
祭からおいてけぼりの
私の悲しさを
吹き飛ばした

奏

甲西北中学校　三年　深水（ふかみ）　鈴加（れいか）

喜びの音がする
うれしそうに軽い音で
はねるような音符をならべて
喜びを表して　笑顔いっぱい

怒りの音がする
うったえるような大きい音で
ぐちゃぐちゃの音符をならべて
怒りを表して眉間にしわよせ

哀しみの音がする
涙のようにきれいな音で
ふるえている音符をならべて
哀しみを表して目を腫らし

楽しみの音がする
わくわくしたようなはずむ音で
たくさんの音符をならべて
楽しさを表して手をつないで

奏でる
全身全霊で自分の心情を
多種多様なものをつかい
自分しか出せない音
ただひとつの楽譜を
あなたは奏でる

佳作（平成二十八年度）

僕とは？

日枝中学校　三年　木田（ぼくだ）　流矢（りゅうや）

僕とは誰だろう？
ふと疑問に思った
自分に聞くと　わからぬと
知人に聞くと　君だよと
自然に聞けども返事はなく
犬に聞いたら　ワンとひと鳴き
皆に聞いてもわからなかったので
空に聞いてみた　すると雨が一日降りそそぎ
次の日外に出てみると
鏡の如く光るもの
水溜りは誰かを映してて
これが君だと言っていた

笑顔

石部中学校　三年　谷村（たにむら）　和哉（かずや）

一人が笑顔になれば
みんなが笑顔になる
みんなが笑顔になれば
世界が笑顔になる
笑顔ってすごいな
一人のさりげない笑顔が
みんなに笑顔を与えるんだから
笑顔って素敵だな
一人の笑顔が
世界を明るくするんだから
だから僕は笑顔でいよう

佳作（平成二十九年度）

笑顔

石部中学校　一年　吉田（よしだ）　かりん

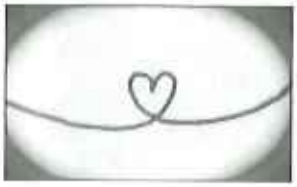
赤ちゃんが笑った。
笑うつもりはないのに、私も笑った。
笑う私を見て猫も笑った。
空も雲も笑った。

ちがう
私の心が笑ったから、みんなが笑ったように見えたんだ。
温かい無邪気な笑顔をくれた、赤ちゃんのように
幸せになりたいのなら
自分から笑おう。

糸

日枝中学校　一年　谷（たに）　颯真（そうま）

この世界は
いろいろな糸でつながっている
人と人の糸　自然の糸
生物との糸　国と国の糸
すべてが糸でつながっている
だけどある時　大切な人との
糸が切れてしまうことがある
だから糸と糸がつながっている時間を
大切に生きよう



ボール

日枝中学校　二年　荒木（あらき）　若菜（わかな）

ボールを空高くとばしてみた
するとどうだろう
雲ひとつない空に高くのぼったボールがひとつ
小さく見えた
それはまるでボールが自分から
空へ空へ　もっともっと高く高くと思いながら
一生懸命あがっているように見えた
あのボールは今どんなふうに思って
どんな景色を見ているのだろうと思った

【五七五　部門】

小学校一年生～三年生の部

○掲載作品の作者の学年は、入選当時のものです。

第六回（平成二十五年度）		佳作
最優秀賞		平成二十五年度
優秀賞		平成二十六年度
第七回（平成二十六年度）	第九回（平成二十八年度）	平成二十七年度
最優秀賞	最優秀賞	平成二十八年度
優秀賞	優秀賞	平成二十九年度
第八回（平成二十七年度）	第十回（平成二十九年度）	
最優秀賞	最優秀賞	
優秀賞	優秀賞	

第六回（平成二十五年度）最優秀賞

下田小学校　一年　竹島　杏

どんぐりが　ころんだときに　なきました

【評】

どんぐりはいつだって転んでいるよう、楽しそうであり哀しくもあります。童謡のメロディーと共にどんぐりとの一体感があり、杏さん自身の世界が詠われています。（平賀　胤壽）

第六回（平成二十五年度）優秀賞

三雲東小学校　二年　松原　しほ

ひまわりが　だれかを見つめて　まっている

石部小学校　一年　花房　梛小

どんぐりに　かおをかいたら　ダンシング

第七回（平成二十六年度）最優秀賞

三雲東小学校　二年　吉野　さらさ

ありくんが　あれれあれれと　まよいみち

【評】

蟻の列をじっと観察。するとその中の一匹がいや数匹がつられるように右往左往、まるで迷い道をたどっているようです。さらささんとアリさんが一体の「あれれあれれ」という感情表現が愉快で深みがあります。

〈平賀　胤壽〉

第七回（平成二十六年度）優秀賞

岩根小学校　一年　青木　柚衣奈

あきかぜが　とんぼのめがね　あかくする

石部南小学校　三年　黒岩　萌愛

草原で　光るたんぽぽ　たからばこ

第八回（平成二十七年度）最優秀賞

石部南小学校　三年　宮田　夢子

もみじのき　あといちまいが　おりてきた

【評】

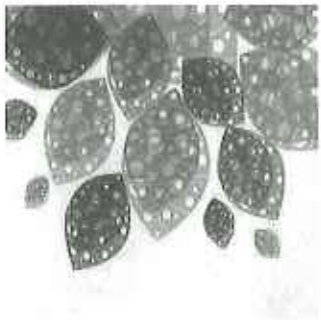
赤や黄色にうつくしく染まったもみじの葉っぱ、わたしたちにせいいっぱい何かを語りかけるようです。冬はすぐそこまで、いよいよその葉っぱも役目を終え、風に乗るようにして散ってゆきます。そしてさいごの一枚、「おりてきた」とは思わず手を差し伸べるような作者・夢子さんとの一体感があり、いとしく豊かな情感にあふれています。

〈平賀　胤壽〉

第八回（平成二十七年度）優秀賞

菩提寺北小学校　三年　辻　七海

あかぎれを　おもいだすたび　ゆうきでる



下田小学校　三年　宿谷　蒼大

あきのもり　どうぶつたちが　いそいでる

第九回（平成二十八年度）最優秀賞

下田小学校　三年　酒井　栄拡

お月さま　コンパスくるり　まるくらべ

【評】

びっくりするようなとっても大きくてまんまるいお月さま。その明るく美しい円に負けまいと、コンパスでよどみなくじょうずに描いた丸。まるでお月さまの方が、その大きな丸を覗きこんでいるような臨場感と、ほどよいリズム感にひかれます。〈平賀　胤詩〉

第九回（平成二十八年度）優秀賞

水戸小学校　一年　久保　志織

もみじはね　てのひらになる　あくしゅだよ

石部南小学校　三年　西川　美咲

ゆきだるま　いつもだまって　とけてゆく

第十回（平成二十九年度）最優秀賞

岩根小学校　三年　山中　みらい

ずかん見て　ふむふむこれだ　つかまえた

第十回（平成二十九年度）優秀賞

石部南小学校　一年　岩本　ヴィクトリア

かえりみち　まつぼっくりの　プレゼント

石部小学校　二年　金子　遥香

もみじがね　ひらひらおちて　おおわらい

【評】

どのような種類で、どういった生態なのか興味がつきません。わくわくとして図鑑を開き、懸命に探し続け、そこで確実にとらえた発見の喜びがあふれています。「これだ　つかまえた」という少し飛躍したフレーズが力強く、作者の満足気でいきいきとした表情がうかがえます。（平賀　胤壽）

佳作（平成二十五年度）

じきゅうそう　タンタタタンタ　ゴールまで

菩提寺小学校　三年　眞野（まの）　慧茉（えま）

ありがとう　きみとにこにこ　いいことば

三雲小学校　二年　えすてべす　まこと

どんぐりが　くるまみたいに　とんでった

岩根小学校　一年　塚田（つかだ）　永遠（とわ）

かみなりは　くろいくもに　いるんだね

水戸小学校　一年　渡部（わたなべ）　綱介（こうすけ）

佳作（平成二十六年度）

みかんはね　十人かぞく　ああせまい

三雲東小学校　二年　小谷（こたに）　真結（まゆ）

サンタさん　わかがえったら　どんなかお

水戸小学校　二年　馬場（ばんば）　隆斗（りゅうと）

おかあさん　いえでのんびり　かたつむり

水戸小学校　二年　恵美（えみ）　ゆりあ

けんだまは　なかなかわたしの
　　みかたしない

岩根小学校　三年　久保（くぼ）　愛華（あいか）

ザリガニを　さわるぼくの手　ふるえてた

石部小学校　二年　若松（わかまつ）　泰地（たいち）

佳作（平成二十七年度）

にっこりと　どんなゆめかは
　　ひみつです

菩提寺北小学校　一年　中西（なかにし）　紗希（さき）

イガイガは　くりを守るよ　けいびいん

下田小学校　三年　木場田（こばた）　萌優（もゆ）

夕やけを　たべてみたら
　　みかんあじ

三雲東小学校　三年　川中（かわなか）　功太（こうた）

ゆうやけを　見ながらいこう
　　ごはんだよ

三雲東小学校　三年　小谷（こたに）　真結（まゆ）

なかやすみ　どこにいるのか　かまきりは

菩提寺小学校　一年　松本（まつもと）　七音（なおと）

佳作（平成二十八年度）

さらさらと　ゆれるすすき　あきのアイドル

石部小学校　一年　近藤（こんどう）　志優（しゆう）

秋の色　何にしようか　まよっちゃう

菩提寺小学校　二年　鈴木（すずき）　いつき

ふゆにはね　たいようあるか　わからない

菩提寺北小学校　二年　東（ひがし）　莉空（りく）

空の上　どんなところと　鳥にきく

三雲小学校　三年　立入（たちいり）　月瑚（つきこ）

さくらがね　なみだとともに　おちていく

三雲東小学校　三年　岩井（いわい）　柚稀（ゆずき）

佳作（平成二十九年度）

うみのみず　ぼくといっしょに　ジャンプする

下田小学校　一年　泉（いずみ）　芳紀（よしき）

あきになる　いろいろおちる　ぽっとぽと

三雲東小学校　二年　竹川（たけがわ）　奏介（そうすけ）

ゆうひさん　ジャムみたいで　まっかだね

水戸小学校　三年　藤崎（ふじさき）　雫（しずく）

雨の日は　ながぐつはいて
　パシャパシャパシャパシャ
　かさもわすれず　おでかけしよう

水戸小学校　三年　内田（うちだ）　夢菜（ゆな）

もみじたち　やさしいかぜと　どこへいく

菩提寺北小学校　三年　青野（あおの）　桃子（ももこ）

【五七五　部門】

小学校四年生～六年生の部

○掲載作品の作者の学年は、入選当時のものです。

第六回（平成二十五年度）　第九回（平成二十八年度）　佳作

最優秀賞　平成二十五年度

優秀賞　平成二十六年度

第七回（平成二十六年度）　第十回（平成二十九年度）

最優秀賞　平成二十七年度

優秀賞　平成二十八年度

平成二十九年度

第八回（平成二十七年度）

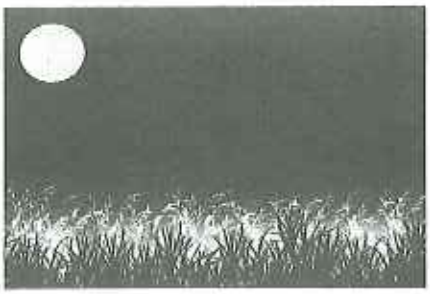
最優秀賞

優秀賞

第六回（平成二十五年度）最優秀賞

三雲小学校　六年　中川　稀理

見えるのは　月とすすきと　私だけ



【評】

ワタシを少し客観視できるようになった高学年らしい一句です。一瞬の心象風景でしょうか、未知のあるいは大人の世界を垣間見たような感があります。〈平賀　胤壽〉

第六回（平成二十五年度）優秀賞

水戸小学校　四年　古道　皓太

ぞうきんが　黒くなったら　一等賞

岩根小学校　五年　坂尾　木窓

金魚から　プクプク出たよ　青い空

第七回（平成二十六年度）最優秀賞

岩根小学校　六年　西田　七海

空が泣く　かえるたちが　目を覚ます

【評】

蛙にとって雨は友だちのようなもの。悲しいけれど空が泣けば夢うつつの蛙も目をぱっちりとあけ、喉を鳴らし再び活動を始めることでしょう。こうした蛙や空といった自然に寄り添う気持ちを大切にしたいものです。

〈平賀　胤壽〉

第七回（平成二十六年度）優秀賞

下田小学校　四年　ベガ　ユリ

びわこでね　手にあたったよ　つよいかぜ

水戸小学校　六年　安永　ほのか

秋風で　さらさら笑う　もみじかな

第八回（平成二十七年度）最優秀賞

菩提寺北小学校　六年　田中　星花

ランドセル　六年間を　せおいこむ

【評】

ランドセルを背負い通い続けた六年間、今は卒業まであと一息というところでしょうか。「せおいこむ」という表現は決して重荷というようなしんどさではなく、小学校生活でたくわえ築き上げてきた自分の宝物と考えたいものです。次のステップ、中学校生活への大きな可能性、その礎となる重さなのです。

〈平賀　胤壽〉

第八回（平成二十七年度）優秀賞

石部南小学校　五年　船田　未空

あきがきて　もみじふみわけ　シャカシャカと
きのみころころ　おどりだす

岩根小学校　四年　石田　寛和

ありんこは　ちょっとの雨も　台風だ

第九回（平成二十八年度）最優秀賞

下田小学校　六年　諸木　まいか

たのしみは　年のはなれた　妹の
未来のことを　考える時

【評】
妹の未来を考える…なんと高潔で素敵な時間でしょう。ほんの少し子どもからの脱皮をはかる六年生ならではの尊い感慨でしょう。妹を一人の人間として見つめ、敬うことのでき得るその年の差、そしてよきお姉さんぶりがうかがえます。
〈平賀　胤壽〉

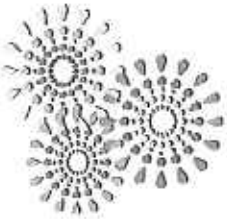
第九回（平成二十八年度）優秀賞

石部南小学校　五年　北村　美怜

一年生　桜につつまれ　やってきた

岩根小学校　六年　村井　茉奈

失敗は　花火のように　消えてゆけ



第十回（平成二十九年度）最優秀賞

三雲小学校　六年　佐川　結唯

走りぬく　自分の風に　もみじのせ

【評】

風を切るようにさっそうと走り抜いたのでしょう。最初はちょっとしんどくて、風が吹きすさぶつらい道だったかもしれません。そのような風には負けることはなく、「自分の風」と表現した白らが起こす風、その風に紅葉の落葉を乗せるという、躍動感あふれる着想にひかれました。

〈平賀　胤壽〉

第十回（平成二十九年度）優秀賞

石部南小学校　六年　岡田　結茉

県水の　とても静かな　水の中
いつもとちがう　水をひとかき

石部南小学校　六年　柏原　真珠

目かくしの　タオルのすき間に　笑い声
スイカのように　笑顔はじける

佳作（平成二十五年度）

昨日とは　明日の自分を　おす係
菩提寺北小学校　五年　高見昌照（たかみまさてる）

どんぐりの　ぼうしを集めて　ぼうし屋さん
石部南小学校　六年　荻野百絵（おぎのもも え）

白ウサギ　まあるくなって　食べてるよ
下田小学校　五年　加藤和咲（かとうなぎさ）

風がふき　秋のトンネル　もう終わり
三雲東小学校　五年　三好梨央（みよしりお）

てっぺんに　登った時は　記おくない
石部小学校　四年　成徳麻帆（なりとくまほ）

猫じゃらし　猫がやすらぐ　休けい所
菩提寺小学校　六年　水口葉月（みずくちはづき）

佳作（平成二十六年度）

うまそうな　ぶどう一つぶ　どうですか
三雲東小学校　五年　岩佐（いわさ）　将英（しょうえい）

熱帯夜　小さな主役　光る虫
石部小学校　五年　小谷（こたに）　恭子（きょうこ）

わすれんぼ　ひとのきおくを　たべるんだ
下田小学校　四年　岩佐（いわさ）　大夢（ひろむ）

見まわして　あなたのそばに　みんないる
三雲小学校　四年　小西（こにし）　帆夏（ほのか）

百メートル　きんちょうしたまま　スタートだ
ぬかされあせり　ビリかもしれない
菩提寺北小学校　六年　林（はやし）　久瑠美（くるみ）

佳作（平成二十七年度）

冬近し　木張りのゆかが　ひえてゆく

三雲東小学校　六年　野村（のむら）　侑世（ゆうせい）

あああああ　意外とハマる
せんぷうき

三雲東小学校　五年　小島（こじま）　佑紀乃（ゆきの）

自転車で　あせる気持ちと　花の波

菩提寺北小学校　五年　和田（わだ）　陽翔（はると）

空見上げ　今夜のおかず
いわしかな

菩提寺小学校　五年　石田（いしだ）　かのん

すすきがね　まん月みながら　わらってる

水戸小学校　四年　前田（まえだ）　優（すぐる）

佳作（平成二十八年度）

冬の風　ねおきのぼくの　目覚ましだ
石部南小学校　四年　伏見（ふしみ）　洸星（こうき）

やきいもは　黄色の幸せ　つまってる
下田小学校　四年　野村（のむら）　未来（みき）

けり上げる　ボール届くか　満月に
三雲小学校　五年　勝本（かつもと）　結仁（ゆいと）

走りたい　あいつの背中の　その前を
昨日の自分に　負けないために
下田小学校　六年　西尾（にしお）　康介（こうすけ）

秋の風　赤いアーチを　くぐりぬけ
もみじをのせて　どこへゆくのか
菩提寺北小学校　六年　青木（あおき）　萌（もえ）

佳作（平成二十九年度）

じゅぎょう中　わたしのえんぴつ　おどってる

岩根小学校　五年　山森（やまもり）　日菜（ひな）

白米よ　太陽よりも　光るんだ

石部小学校　五年　柏木（かしわぎ）　隆一（りゅういち）

ふと見ると　緑の山が　赤一面
　楽しくおどる　紅葉の小人

水戸小学校　六年　石川（いしかわ）　陽佳（はるか）

追いかける　気になるにじの　はしっこを

三雲小学校　六年　小林（こばやし）　咲良（さくら）

たのしみは　桜舞い散る　学校の
　自分の名前を　見つけ出す時

下田小学校　六年　大野（おおの）　圭輔（けいすけ）

【五七五　部門】

中学生の部

○作品集への掲載作者については、当該入選当時のものです。

第六回（平成二十五年度）　第九回（平成二十八年度）　佳作

最優秀賞　平成二十五年度

優秀賞　平成二十六年度

第七回（平成二十六年度）　第十回（平成二十九年度）

最優秀賞　平成二十七年度

優秀賞　平成二十八年度

平成二十九年度

第八回（平成二十七年度）

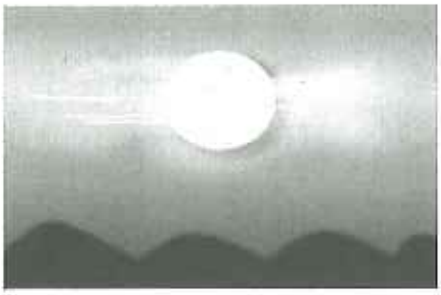
最優秀賞

優秀賞

第六回（平成二十五年度）最優秀賞

日枝中学校　三年　奥村　佑典

夕焼けに　十歩先まで　のびる影



【評】

夕焼けはその美しさにとどまらず、明日へとつながる希望の色。そこに伸びる長い影は、叙情的で力強いものです。十歩先まで…という感触が心地よいのです。

（平賀　胤壽）

第六回（平成二十五年度）優秀賞

甲西中学校　二年　岡　優統

雨の中　人が佇む　グラウンド
またはじめから　やり直したい

石部中学校　一年　野中　遼輔

せみよりも　大きな声で　笑ってる

第七回（平成二十六年度）最優秀賞

甲西中学校　二年　村司（むらし）　璃奈（りな）

坂道を　ブレーキかけずに　くだってく
今日もはじまる　SCHOOL（スクール）　LIFE（ライフ）

【評】

さぞかし毎日が新鮮な学校生活朝のスタート。まずは自転車通学のさわやかな第一章が、英語表記をまじえいきいきと自己描写されています。ちょっと危ないけれど、若さゆえの高揚感が伝わってきます。〈平賀　胤壽〉

第七回（平成二十六年度）優秀賞

石部中学校　一年　小林（こばやし）　理奈（りな）

落ち葉散る　部活中の　グラウンド
私の音色　響いてるかな

甲西北中学校　三年　日野（ひの）　聖菜（せいな）

教室が　オセロのように　衣替え

第八回（平成二十七年度）最優秀賞

甲西北中学校　二年　中村　鈴

ハードルを　どんどん跳んでく　あの背中
もう走りたくない　誰かのうしろ

【評】

「あの背中」とはライバルと目する友なのでしょうか、どんどん自分とは距離を離してゆくその悔しさがにじみ出ています。そしてその体験から、自分は走るのはやめよう誰かの後ろを追うようなことではなく、自分なりの歩み方をしようとする密かな想いが言外に窺えます。自分を客観視できる中学生らしい歌となりました。

〈平賀　胤壽〉

第八回（平成二十七年度）優秀賞

甲西中学校　三年　小谷　美帆

息を飲み　上がる指揮棒　したる汗

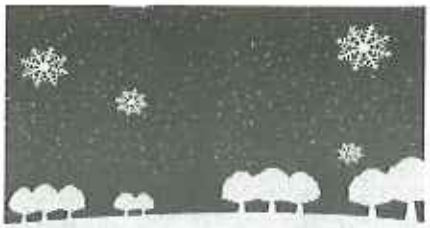
石部中学校　一年　中島　くるみ

秋野菜　色とりどりに　並んでる
どんな料理で　笑顔にしようか

第九回（平成二十八年度）最優秀賞

甲西中学校　三年　小田　天舞

白い息　空の星座に　のばした手



【評】

冬の寒空と想像しますが、その澄みきった空気感が伝わってきます。あまりの星座の美しさに、寒さをいとうことなく全身を投げ出すかのようにふと手を伸ばしてしまったのでしょう。中七は「星座の空に」あるいは「空に星座に」とすることを考えてみましょう。

〈平賀　胤壽〉

第九回（平成二十八年度）優秀賞

甲西北中学校　三年　芳賀　海斗

セミの声　今年もきたな　俺の夏

石部中学校　三年　青木　彩優里

ひまわりが　目指すは空の　日の光

第十回（平成二十九年度）最優秀賞

石部中学校　二年　谷村　佳南

目の高さ　母とそろった　中二の夏

【評】

この句のポイントは「目の高さ」にあります。中学生ともなれば、身長だけではなく、そろそろ物の見方や考え方においても、親を越したり越えたりの心身ともに尊い成長の時期。母と接触する時間も多い夏の期間、身長だけではなく、どこか母娘の言い知れぬ成長の感慨をうかがい知ることができます。

〈平賀　胤壽〉

第十回（平成二十九年度）優秀賞

日枝中学校　二年　佐藤　陽亮

秋風が　私の隣を　走ってる

石部中学校　三年　水谷　茜里

辛いとき　見上げた星に　励まされ
小さくたって　輝きつづける

佳作（平成二十五年度）

祖父の声　思い出しつつ　すいか食べ

秋の空　どこまで届く　私の手

冬の歌　心に届く　白い音

テキストの　放物線に　サクラ咲け

石部中学校　一年　園部（そのべ）　裕人（ゆうと）

日枝中学校　二年　上西（じょうにし）　菜月（なつき）

甲西北中学校　一年　寺戸（てらど）　咲華（さくら）

甲西北中学校　三年　梅中（うめなか）　彩澄（あすみ）

佳作（平成二十六年度）

満月と　君を見つめて　ふと笑う
秋桜や　触れ合うたびに　赤くなる

甲西中学校　三年　大島（おおしま）　大地（だいち）
甲西中学校　三年　西岡（にしおか）　功樹（こうき）

森の中　木の実がそっと　すわってた
見るたびに　にょきにょき背丈が　伸びてゆく
いつか私も　抜かすひまわり

日枝中学校　一年　井上（いのうえ）　花（はな）
甲西中学校　二年　小谷（こたに）　美帆（みほ）

人生の　岐路に立たされ　迷う僕
冬至を過ぎると　りつぜんとする

甲西北中学校　三年　犬塚（いぬづか）　正隆（まさたか）

佳作（平成二十七年度）

星の数　それらが僕らの　可能性

甲西北中学校　一年　横井茂虎（よこいしげとら）

コスモスが　がんばるぼくの
背をおした

日枝中学校　三年　浅里一希（あさりいつき）

冬支度　土の中では　大渋滞

日枝中学校　二年　田中和希（たなかかずき）

あと少し　認めたくない　夏休み

石部中学校　三年　三上紗輝（みかみさき）

雪がとけ　苦笑いする　ゆきだるま

甲西中学校　二年　田中楓斗（たなかふうと）

佳作（平成二十八年度）

ゴールして　足を伸ばせば　天高し

日枝中学校　一年　藤井（ふじい）　魁輝（かいき）

つるべ落ち　星の外灯　タッタッタ

甲西中学校　一年　佐山（さやま）　早矢（はや）

青々と　していた木たちも　仮装する

日枝中学校　二年　阪（さか）　明佳音（あかね）

帰り道　白ヘルメット　少しずつ
　オレンジ色に　染まっていくよ

甲西北中学校　二年　志磨村（しまむら）　凜（りん）

教室に　椅子がたくさん　並んでる
　そこに仲間の　絆いっぱい

石部中学校　二年　北村（きたむら）　陽晴（ようせい）

佳作（平成二十九年度）

帰り道　立ちこぎ急ぐ　自転車で
家々のすき間　ちいさな夕焼け

甲西中学校　二年　山中（やまなか）　彩花（あやか）

静寂に　包まれ奏でる　虫の音よ
夜間限定　吹奏楽部

石部中学校　二年　小谷（こたに）　恭子（きょうこ）

太陽に　勝負を挑む　入道雲

甲西北中学校　二年　竹澤（たけざわ）　拓人（たくと）

指先に　触れては落ちる　秋時雨

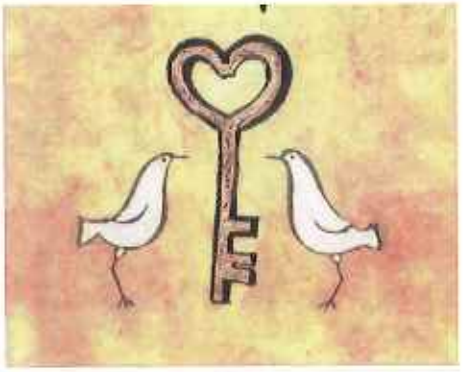
日枝中学校　三年　中村（なかむら）　友奈（ゆな）

最寄り駅　二段飛ばしの　春の君

甲西北中学校　三年　望月（もちづき）　達成（たつなり）

いのちのよろこびを　うたう
美しい詩のかずかず
～あとがきにかえて～

詩人　野呂　昶



詩とは何か

人間はものを感じることのできる動物です。美しい景色を見ると、心がうつくしく、かがやくような気持ちになります。よいおこないを見ると、心がそれらのおこないにそめられて、あたたかくやさしい気持ちになります。ふしぎなものを見てびっくりすることも、悲しいことにであって心がしずんでしまうことも、〝ものを感じること〟から起こってくるのです。詩は、このような心のよろこびやおどろきや、かなしみを、もっとも短いことばで書きあらわしたもののことです。

美しいことばは、人の心をうつくしくするはたらきがあります。正しいことばは、人の心を正しく明るくします。はんたいに、きたないことば、らんぼうなことばは、人の心をきたなく、らんぼうにします。詩を書くことの大切さは、このためにあるのです。

詩を書くよろこび

わたしたちは詩を書くことによって、なにを得ることができるでしょうか。

（一）じぶんの心のなかを、ふかく見つめることができるようになります。

詩は、まわりの風景やできごとを、よく見るところから生まれてきます。それといっしょに、じぶんの心のなかや人の心のなかも見えてきます。

（二）美しいもの、よいものへの関心が深まります。

道ばたに咲く、小さな一りんの花の美しさにも、心がうごかされるようになります。また、目に見えない他人のよいおこないにも、気がつくようになります。

（三）新しいじぶんを発見できます。

人や動物や植物などの生きざまに心打たれることは、じぶんもそのように生きたいと、願うことでもあります。詩を書くことで、じぶんがどのようになりたいか、なにをしたいか、じぶんについて、新しい発見ができます。

このたび、湖南市の小・中学生が書いた詩や短詩形（俳句・川柳・短歌）が、このように美しい本になりました。どの作品も、その人でなければ発見できなかった感動が、うつくしい言葉で表現されています。

「湖南市の小さな詩人たち」に参加した小・中学生のみなさんとともに、喜びたいと思います。

第六回～第十回（平成二十五年度～平成二十九年度）

湖南市の小さな詩人たち

～子どもたちが創った
詩・俳句・川柳・短歌　入選作品集～

明日の私は新しい

発行日　平成三十年十月
編集・発行　湖南市教育委員会
印　刷　株式会社　きじまや